

第6回 石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ 議事概要

日時：平成29年12月19日（火） 9:30～11:30

場所：南幌町ふるさと物産館「ビューロー」3階会議室

出席者：敬称略

矢部 和夫（札幌市立大学 大学院 デザイン研究科 教授）座長

尾暮 靖志（南幌町 都市整備課 課長）

浅野 茂（南幌町 教育委員会 生涯学習課 社会教育グループリーダー）

木村 浩二（雪印種苗株式会社 環境緑化部 緑化事業課 自然環境グループ）

新田 紀敏（北海道立総合研究機構 森林研究本部 緑化樹センター 緑化グループ主査）

黒田 健一（空知総合振興局 地域創生部 主幹）

濱田 暁生（NPO法人 ふらっと南幌 代表理事）

矢部 浩規（寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム 上席研究員）

新目 竜一（寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 水環境保全チーム 上席研究員）

松田 泰明（寒地土木研究所 特別研究監付 地域景観ユニット 総括主任研究員）

横濱 秀明（札幌開発建設部 河川計画課長）

足立 文玄（札幌開発建設部 江別河川事務所長）（以上12名）

欠席者：

小林 重雄（南幌町 郷土史研究会 副会長）（以上1名）

1. 開会

2. 講演

矢部座長より札幌市平岡公園における人工湿地の群落種組成の変遷について講演。

3. 議事

(1) 石狩川下流幌向地区自然再生のこれまでの取り組み経緯について
意見・質問等はなし

2) 石狩川下流幌向地区自然再生の検討事項について

1) 湿原再生ミーティング活動報告

【遮水整備の経緯と本施工後の遮水効果】

（矢部：寒地土研）

降雨状況により若干変動するかもしれないが、工事実施後の今年（2017年）の地下水位の維持範囲等水文的評価からは、遮水整備効果は発揮されていると考えられる。

(矢部座長)

一定の遮水効果が得られ、水質にも反映されている。ほかの(湿生)植物の成長を助ける意味もある初期導入を行っており、ここまでの段階は順調と思われる。

ただ、ボグ形成における泥炭表面の盛り上がりには、周辺から流れてくる地下水の運動エネルギー、上方向の水の動きが必要とも言われているため、閉鎖空間でもある再生地においては状況を見ていかなければならない。

【湿生植物の導入手法と H29 年度の導入結果】

(木村)

初期導入種で目標導入数量に満たなかった種は育苗を継続する。

今後は重点区域以外の植栽もあるかと思われるため、継続可能な種は育苗を継続する方向で考えている。

中期以降の導入種の一部は初期生育が非常に遅く、育苗方法に工夫が必要と考えている。

(新田)

中期以降の導入種の一部は(育苗方法が確立していない)育苗等の状況が思わしくない。発芽後の生態がよく分からない、生長が悪いなどの問題があり、検討していきたい。

(矢部座長)

施肥については控えながら進めてきた経緯があると思われるが、これだけ生育が悪い状況では(施肥を)視野に入れて考えているか。

(新田)

今までは現地のもを使い、苗をそのまま導入できるように進めてきたが殺菌等に気をつけながら、少し条件の良い用土を使用し、導入に影響しない程度の育苗段階の施肥をするなど検討したい。

(矢部座長)

育苗段階の施肥は、現地導入の数か月前までと考えている。

(ほか)

湿原再生に関する役割分担については資料のとおりとすることをWSにて了承。

2) 利活用ミーティング活動報告

【地域イベントなどについて】

(濱田)

ふらっと南幌での地域活動は自然再生事業との関連づけを意識しながら行っており、町外からも多く参加を得ているが、イベント時期は忙しい農業に携わる地元の方々と連携を強めていく方法を模索している。また、一般町民の方々に関しても、社会教育と関連づけて声をかけたいと思っているが工夫が必要と思われる。ミズゴケディスプレイや様々な情報を組み合わせて地元で普段から発信していくことで関心を持っていただいて、イベントへの

参加を促すよう次年度に向けて検討していきたい。

【景観などについて】

(松田)

どうして、このような景観となっているのか、植生や入植の歴史など、景観の意味を理解すると、見え方が随分と変わってくる。

昔の北海道にあった普通の景観であることに価値がある場所であり、余り手をつけない、手をかけないことを基本にしながらも、景観の阻害となる周囲の人工物を木で隠すことや、川が見えたほうが良い等ということミーティングで議論している。

幌向湿原の再生地をみんながイメージできるような景観の情報を常に発信し、現地に来てそれと同じものを見て、ここに来たと確認できるようなものを目指すと良いと思われる。そういったところから定点観測的によって湿原が変わっていく様子を、過去も振り返ってわかるようにしていけばよいということもミーティングで検討している。

また、人は昔のものを見たいという普遍的な欲求があるので、湿原に絡む古写真を地元の方々が中心になって集めて公表するというのもミーティングで検討している。

南幌の古い写真を集められると、まちづくりや地元のことを考える場にもなる。

(濱田)

提供写真をミズゴケディスプレイなどと組み合わせて展示すると関係づけがわかって興味や関心を引き出せるのではないかと思われる。

(浅野)

広い意味で町の歴史を知るという視点であれば、写真を所持している町民もいるのではないかと思われるため、公募で集まる可能性はある。

(新目)

地域の広がり観点でいうと、隣の長沼町はグリーンツーリズムが非常に盛んで、本州の学生が多く来ているので、長沼町と連携しながら、環境学習、体験学習の場としてこの場所を利活用して広げていくといった取り組みも有効な方法かと思う。

(矢部座長)

古い写真があると、幌向湿原で何を目指していくかということの参考にもなってくるので、発見できたらよいと期待している。

【地域連携による植生導入エリアについて】

(新田)

地域連携による植生導入種は盛夏に花が咲くものしか記載されていないため、季節の彩りが続く春、秋に花が咲く種も導入するとよいと思う。苗づくりには時間等もかかるが、早めに計画すればバランスよく供給できると思われる。

(松田)

利活用ミーティングにて原生花園的な景観を一部つくっていかうという方向性が出た後は、種の選定や植栽方法などの技術的なところは湿原再生ミーティングにバトンタッチするなど連携しながら進められればよい。

(濱田)

私たちも湿原再生フットパスで、植栽体験させていただいたが、自分たちが植えたものは愛着もあるので、色々な機会に利活用と自然再生の連携を図っていくとよいと思う。フットパス参加者が植栽するイベントを組み込むことは可能と思われる。

【景観に関する施設整備について】

(矢部座長)

資料の課題と役割分担について、必要な景観、施設の整備について言及があるが、湿原再生ミーティングにおいても河川管理者から情報をいただきたい。

(足立)

これまで出た意見について来年度早々に事務局で一度まとめ、当座おこなうもの、検討するもの、長期的に考えていくものと分けながら、必要に応じて関係者にご相談する。

【利活用ミーティングの形態について】

(松田)

湿原再生ミーティングは学術的、専門的であるため今の形でも良いと思うが、利活用ミーティングは、河川管理者が主体的である現体制から地元中心とする形に少しずつ変えていくほうが活性化し、多様な主体が入りやすくなる地元も交えて今後検討してほしい。

(木村)

苗づくりなどは地元が参加する糸口になりやすいと思うので、検討してほしいと思う。

(濱田)

やったことの成果が見える。ということが重要だと思う。種を採って、育てて植えたものが翌年どうなっているかなど、効果が見えやすいことを選びながら声をかけてもらえれば、我々としても取り組めると思う。

(足立)

この事業が地元主体で実施され、河川管理者は側面的、管理面でのサポートする形があるべき姿ではないかと考えている。現状では植生の初期導入が始まった段階であり、まだ関係者全員でどういったものを最終的につくっていくかイメージが共有できていないところもある。河川管理者主導から地元中心となっていく段階に入るところであり、意識しながら、少し長いスパンで考えていきたい。

(松田)

すぐには無理かと思うが、そういう方向(地元中心となっていく)を目指しているということらを皆で常に確認して共有していくのは大事。

【展示物の設置について】

(矢部座長)

情報発信についてミズゴケディスプレイ、配布物、パネルなどあるが町内に常設展示していただくことは可能か。

(尾暮)

生涯学習センターのロビーは展示物を置いており、設置はできるだろうと思う。

(浅野)

昔はこういった場所があったのだという説明を加えながらでなければ、地域の理解はなかなか難しい部分があると思う。昔、教育委員会で湿生植物群という形で保護していた地区があり、そこが森林化する前に何か残しておこうということで、当時、学芸員の先生が残してくれた植物の標本が郷土資料室にあった。一緒に展示していけば、より理解が深まるのではないか。(標本をWSメンバーに展示)

【イベント開催について】

(矢部座長)

濱田さんには来年度も幌向再生に関連したイベントなどにご協力いただけるか。

(濱田)

私たちができる範囲で協力したい。地域の魅力を味わっていただくことの一環として俳句会、防風林の環境の観察、鳥の観察、音楽などと組み合わせることで興味を広げていくことを考えている。

3) H30 年度の取り組み計画について

(新田)

モニタリング計画(案)について、植物相調査の調査時期は夏季1回としているが、各季節など書いたほうがよいと思う。(植物相の調査は1回で終わるということはない)

(松田)

利活用は議論の範囲も広いということがあって、そこにいる人たちだけでは、それ以上話が進まないところがある。そのときのテーマによって関係しそうな地元の団体や人がいるのであれば、積極的に声をかけてミーティングに参加してもらおうと、実現性も高くなり、広がりも出てくるので、今後新たなメンバーの参加が必要。

4. 閉会

以 上